

大正期から昭和初期における成城小学校の カリキュラム開発と体操科の授業に関する研究の蓄積

木原 成一郎

(2002年9月30日受理)

Curriculum Development at the Seijo Elementary School and Teaching of Physical Education
from the Taisho Era to the early years of the Showa Era

Seiichiro Kihara

The purpose of this study was to review studies that explored the curriculum development at the Seijo Elementary School and teaching of physical education from the Taisho Era to the early years of the Showa Era. The results are summarized as follows: 1) The influences from the educational research studied in USA have to be taken notice in case of exploring the curriculum development at the Seijo Elementary School from 1917 to 1945. 2) The reformation of the subjects was limited to teaching method except Japanese and science. 3) As the reformation of physical education lessons pre World War II was limited to teaching method, the study about the reformation of physical education lessons at the Seijo Elementary School from 1917 to 1945 have to be explored from the viewpoint of the reform of teaching materials and contents.

Key words: Curriculum Development, the Seijo Elementary School, Liberal Education, Physical Education

キーワード：カリキュラム開発，成城小学校，自由教育，体操科

はじめに

本研究の目的は次の二つである。第1の目的は、大正期から昭和初期の成城小学校におけるカリキュラム開発を対象とし、小学校全体のカリキュラム開発や各教科の指導計画作成という点から検討を加えた先行諸研究の系譜を区分けし、先行研究の到達点を把握することである。第2の目的は、大正期から昭和初期の体操科の授業の実態を明らかにしようとした先行諸研究の系譜を区分けし、大正期から昭和初期における体操科の改造に関する教授理論の観点からの先行研究の到達点を把握することである。この二つの検討を通して、大正期から昭和初期の成城小学校におけるカリキュラム開発を対象とした歴史的研究が踏まえるべき分析の観点や研究方法を、特に体操科の場合に即して明らかにしたい。

成城小学校は、初代校長である澤柳政太郎(1865-

1927)が唱えた『実際的教育学』(1909)の構想を、教育の実際に照らして検証する実験学校としての性格を持っていた。それは、1917年の開設に当たって発表された「私立成城学校創設趣意」の第4項目「科学的研究を基にする教育」の中に示されている(北村和夫, 1979, p.431)。第4項目には、「貴重なる教師としての日々の経験に重きを置き、綿密なる観察実験によって根本的研究を積み教育の実際に科学的の根柢を与えたいとの希望抱負」(傍点原文)(『教育問題研究』1号, 1920〈大正9〉年4月)が語られている。

この「科学的研究」がもつカリキュラム開発に対する成果は多岐にわたるが、最初に小学校全体のカリキュラム編成という点からその成果を検討した諸研究を検討する。次に、各教科の改造を検討した諸研究を検討する(1章)。さらに教授理論の立場から体操科の授業の実態を明らかにしようとした先行諸研究を検討し(2章)、最後に、体操科の場合に即して大正期から昭

和初期の成城小学校のカリキュラム開発を検討する際の研究の観点を整理する。

第1章 カリキュラム開発に関する先行研究

(1) 小学校全体のカリキュラム編成に関する先行研究

鶴岡義彦(1986)は、低学年の理科と社会科を廃止し、「生活科」を新設する方向を出した「小学校低学年の教科構成のあり方について(審議のまとめ)」(小学校低学年の教育にかんする調査協力者会議, 1986(昭和61)年7月)の論拠を再評価するために、大正期成城小学校で主張された低学年理科設置の論拠を整理した。この検討により鶴岡義彦(1986)は、成城小学校の低学年理科設置の論拠を次の5点にまとめた。①低学年児童期は人類史の原始時代に相当するという反復説に立ち、この時期には自然と直接交渉する活動が必要である。②理科は他の教科および語領域の基礎として寄与する。③子どもの興味・関心に従えば、低学年児童に理科教育は可能である。④読み本に理科教材が含まれているが、理科と国語科は独立させるべきである。⑤国民に科学を根付かせ精神面を含む生活を改善するために低学年理科は必要である。

鶴岡義彦(1986)は、低学年理科の廃止と「生活科」の新設の議論は、賛否を問わずこれらの論拠に答える必要があるとしている。そのうえで、特に「理科(自然との直接交渉)が他教科に寄与するという考え方」は現代と共通する低学年理科設置の論拠として重視すべきとしている。鶴岡義彦(1986)は、低学年理科の設置という現代的課題の再検討の視点を導くために成城小学校の教育課程研究の成果を遺産として学んだのである。

竹本英代(2000)は、「各教科について、教科の開始時期と授業時数の変更を試みた他、教材の開発、新教科目、新教授法などが導入された」(p.21)成城小学校のカリキュラム改革は、「戦前のカリキュラムの概念を越え」たものであり、「革新的であったことは明らかである」とする。ただし、従来の成城小学校のカリキュラム改革に関する先行研究は、成城小学校で展開された教育実践の成果をもとにその改革の革新性を明らかにすることに主眼があり、なぜそのような取り組みが生まれてきたのかを論及していないとする。

竹本英代(2000)は、成城小学校創設期の成城小学校校友会所有の新資料等を用いることにより、澤柳政太郎の教科論の生成過程をそのモデルとした欧米の教科論との比較で明らかにすることを通して、欧米の教科論が成城小学校の教科案に及ぼした影響を明らかにすることを目的とした。検討の結果、竹本英代(2000)によ

れば、澤柳政太郎は「ヘルバルト学派の教育学を単に翻訳し紹介しただけでなく、アメリカの児童研究運動を介させて成城小学校のカリキュラム改革を支えるひとつの理論として受け止めていた」ことが明らかとなった。さらに、創設期において成城小学校のカリキュラム改革が澤柳政太郎の教科論の実践過程であったことから、「成城小学校のカリキュラム改革は、ヘルバルト学派の教科論を基本としながらもアメリカ児童研究運動を参考にした教育学研究の産物であった。」(p.30)と結論付けられた。この結論は、成城小学校におけるカリキュラム改革を「ヘルバルト学派批判からアメリカ児童研究への移行過程を顕著に表す実践事例」というカリキュラム論史に明確に位置づけることとなった。

(2) 各教科の指導計画や教材及び指導法の改革に関する先行研究

1) 国語の改造

北村和夫(1977)は、成城小学校で行われた「科学研究」の成果の中心を「各教科毎の教育課程改造」(p.68)にあるとし、「道徳、国語、理科、ダルトン・プランの実践の質的吟味に主要な努力を注いだ」(p.4)結果、国語教育や理科教育では、制度化された教育内容の変革がなされていたと評価している。北村和夫(1977)は「おわりに」で彼の問題意識を次のように述べている。

『『個性尊重』を高唱し、解説する『言葉』の検討にあるのではなく、実際に造り出された学校改造実践における児童把握、特に、いわば『個のみえ方・位置づけ方』の検討にある。その児童把握に基づく教師の具体的なはたらきかけの検討にある」(p.132)

彼の関心は、教科の授業における教師の具体的な働きかけの中に、どのように子どもたちの「個性尊重」がみられるのかというところにあった。北村和夫(1986)は、教科の具体的事例に即して「個性尊重」を検討する問題意識を引継ぎ、国語科における教育内容と教材の改造の具体例を検討した。北村和夫(1986)によれば、「国語科の教科改造(カリキュラム開発)」は、次の6つの基礎研究によりその主張が根拠付けられていた。「①児童の言語能力の発達や言語活動の調査・研究、②国語科の背景にある学問、文化財の研究、③現行国語教育の調査と批判、④海外国語教育との比較、⑤国語科改造による教育効果の調査などの調査・研究」(p.48)

北村和夫(1977)によれば、これらの基礎研究を基盤として、成城小の1909年段階の国語科の編成は、1年で国語科として総合的に扱い2年以降で分科し、「読方」「綴方」「書方」に加えて、「聴方」と「読書」を特設していた。これは、「読方」「綴方」「書方」からなる「小学校令施行規則」(1905(大正8)年)とは異つ

ていた。特に「聴方」科の特設は、『児童語彙の研究』（成城小研究叢書第1編，1905（大正8）年刊）に結実する児童の語彙数の調査結果を根拠とした成果である。

また北村和夫(1986)は、成城小学校の国語科では「学習主体の内面的契機や個性尊重への志向と、言語能力や読書能力養成への志向とが、緊張を孕んだ二つの焦点」(p.60)として機能しあっていたと指摘している。国語を指導した教師の間に、子どもを学習主体と見てその能動的活動を尊重するベクトルと子どもを能力を養成すべき対象と見るベクトルの二つの子ども理解が緊張関係を持ったまま存在していたことがわかる。さらに、成城小の実際的な研究成果は、実際に国語科の授業で用いた教材を同人が編集した『児童読本』（全18巻，1909（大正12）年刊）や『小学 児童文学読本』（全12巻，1911（大正14）年刊）などの自作教科書として出版された。北村和夫(1986)は、「読方」の内容配当表や実際の授業例を検討し、「教科書を自学中心の学習で使いこなしていくという成城的な意味において、『児童読本』『小学 児童文学読本』は、国定教科書とともに成城小の『教科書』と見做されてよい。」(p.65)と評価している。

木村勇人(1998)は、北村和夫(1986)が『児童読本』と『小学児童文学読本』に与えた基本的な評価を踏襲したうえで、特にアイデア出版から刊行された『小学児童文学読本』（全12巻，1911（大正14）年刊）の内容の特徴を明らかにするために、同書を1929（昭和4）年に玉川学園出版部から刊行された改訂版『小学 児童文学読本』（全12巻，1911（大正14）年刊）と比較している。比較の観点は、教材数、総ページ数、作者数（国内、外国）作者別教材数である。木村勇人(1998)によれば、比較の結果、『小学 児童文学読本』は①「童心主義」文学の影響により北原白秋、野口雨情などの童謡作家の作品が多い。②「児童創作」の作品が多いがそれに対する編者の評釈は多くを語らっていない。ここには、児童自身の鑑賞や批評を促す考え方が見られる。③イソップ、グリムなどの寓話が多く採用されている。これは、3年以下の修身廃止に伴って「聴方」に修身を含めたことにより道徳的な教材として採用されたものである。

2) 算数の改造

山本信也(1994)は、1920（大正9）年に発表された教育課程表（佐藤武「小学校に於ける学科課程の改正を論ず」）と1923（大正12）年の教育課程表（『成城小学校』）を比較し、「算術」が「数学」に名称変更されている点に注目する。この変更は名称にとどまらず、それまでの「数の計算」に加えて、「代数」「グラフ」「幾何」などを新たに取り入れた内容の改革に踏み込んだもの

であった。山本信也(1994)は、1920（大正9）年に成城小の教育課程案を提案し「算術」科の革新を唱えた佐藤武の「算術」科観と、1919（大正8）年に成城小に赴任し「数学」科を担当した平田巧の「数学」科構想を比較した。その結果、平田巧の構想は、計算中心の指導内容のあり方を批判し、「指導内容に代数的な内容や幾何的な内容を取り入れた新しい教科の構想」（山本信也，1994，p.20）であり、当時の「中等学校の数学教育に関する改善意見にいち早く注目し、成城小学校の教育課程の編成に取り入れようとした」（山本信也，1994，p.20）と評価した。山本信也(1994)は、この新たな指導内容をもった「数学」科を「総合主義的な教科としての『数学』科の編成」であるとし、「分科主義に対する総合的取り扱いの主張が、中等学校の数学教育ではなく、小学校の算術教育という問題意識の中で受容・具体化されていく過程を示す事例」と指摘した。ただし、山本信也(1994)は、平田巧の「数学」科の構想を検討したにとどまり、その構想を取り入れた1923（大正12）年の教育課程表に示された「数学」授業の実際の検討を課題として残していた。

3) 社会認識教育の改造(修身, 歴史, 地理)

谷口雅子(1999)は、教育現実と関わることのない教育学研究を批判していた澤柳政太郎が、成城小学校においてどのように教育現実を変ええたかという関心から、社会認識教育の実際を検討した。第2次大戦前に小学校で社会認識の教育をになった領域・教科は、修身、国史、地理であった。谷口雅子(1999)によると、大正期の成城小学校では、地理の授業が4年次に週2時間、5・6年次に1時間おかれ、歴史の授業は5年から週2時間、修身科は4年生から週1時間教えられていた。昭和初期になると地理は4年次週1時間、5・6年次に週2時間、歴史は4年で週1時間、5・6年で週2時間となった。谷口雅子(1999)は、これらの領域・教科の改造の担い手として、修身の小原国芳と松本浩記、歴史の上里朝秀と内田庄次、地理の小林茂、をそれぞれ取り上げて検討した。

谷口雅子(1999)によれば、修身科の小原国芳は著作で道徳的批判力を育てると主張するが、彼の指導した研究授業の報告を見ると、実際には教師が具体的事例を素材に自分の考えを子どもに伝達する授業になっている。松本浩記は島田正蔵とともに、成城小と府下の尋常小6年生約400名を対象に、「お手本にしたいほどいい人」の「名前とどこがいいか」を記入させる調査を行い、子どもの思想世界の実態把握に基づいて「偉人伝」を修身科の教材として用いることの必要を説いた。ただし、松本浩記が「偉人伝」を教材とした研究授業の報告によれば、知識伝達型授業を抜け出してい

なかったとされる。歴史科の上里朝秀の授業は、政治史中心の歴史ではなく文化史の重視が特徴である。ただし、松本の研究授業の記録によれば、「英雄崇拜」の時期にある子どもの意識と文化史を教えようとする教師のねらいに齟齬があるという指摘があったという。(谷口雅子, 1999, p.62) 谷口雅子(1999)によれば、ダルトン・プランを採用した高学年では、文部省の国定教科書以外に仲原善忠らの著書がテキストとされ、上里朝秀らの著書が参考書として使用された。地理を担当した小林茂は、公立よりも1年始期の早い成城小学校の地理科では、地形や気候等に関する題材を用いて地理科の導入に位置付けている。そして、教師が提案した問題を子どもが自己の好むやり方で解いていくというダルトン・プラン始期の自学方式が中心の授業であった。

成城小の社会認識教育の授業は、各教師がそれぞれの主張ののっとって指導されていた。初期には、子どもや親に実施した実態調査にもとづき授業を改造しようとした松本浩記らの貴重な取り組みもあったが、ダルトン・プランが取り入れられるようになると、子どもに与える自学のための問題作成に教師の関心が焦点化された。(谷口雅子, 1999, p.66)

山村俊夫(1979)は、成城小学校における歴史教育がどのような人間形成を目指していたのかという問題意識から、『教育問題研究』誌上に掲載された小西重直と柏木雄太郎の歴史教育論、並びに照井猪一郎の歴史指導案、さらに成城小学校編『ダルトン案の主張と適用』に掲載された仲原善忠の歴史指導案を素材に、歴史教育がめざす人間像を検討した。小西や柏木の歴史教育論にあらわれた人間像は、「国際場裡で、競争にうちまけない心身ともに剛健な人物の育成」(p.24)という当時の国家が求めた海外雄飛を目指す「活力のある人物の育成」(p.24)であったという。

また、山村俊夫(1979)によれば、照井猪一郎の歴史指導案は、飛鳥時代の住居の特徴という文化史中心の内容であるが、子どもに問う問題を提案してあるものの、実際の授業は教師の説明に終わってしまったとされる。仲原善忠のダルトン・プランによる「桓武天皇と坂上田村麿」の授業は、教師の出した問題を子どもが教科書や参考書を使って調べていく「学習の個別化」(p.22)の授業である。ただし、「国定教科書あるいはそれに類する参考書の内容をそのまま与えられているのであり、教材内容の分析については等閑に付されていた嫌いがあった。」(pp.22-23)といわれるように、その教育内容の改造は進んでいなかったとされている。

4) 音楽教育の改造

三村真弓(2000)は、大正期から昭和初期に興隆した大正芸術教育運動と新教育運動が、小学校の音楽教育

に与えた影響を明らかにすることを目的とした。そこで、新教育の拠点校とされた成城小学校を事例として選び、音楽教育の中の児童作曲指導法に大正芸術教育運動と新教育運動が与えた影響を検討した。三村真弓(2000)は、成城小学校で音楽教育の改造をになった教員の音楽教育論を児童作曲指導法を中心に検討した。取り上げられた教員は、真篠俊雄、杉生信雄、梁田貞、加藤げん、下総皖一、上野耐之、岡本敏明の7名であり、加藤げん以外は東京音楽学校を出身しているもの6名、外国に音楽の研究のため留学した経験のある者2名を含む音楽の専門家である。

検討の結果、三村真弓(2000)は、成城小学校の音楽教育の内容を「音楽的能力の開発や読譜訓練、及び楽典の知識の獲得が目指された。児童作曲もその目的の一手段として行われた。」(pp.95-96)と特徴づけている。ただし、「①児童の思いを創作の動機づけにするために歌詞に作曲させる、②枠を設定せず自由に作曲させる、③楽典知識や作曲技能の教授を前提にしない」(p.96)加藤げんの教授方法や、上野や岡本らの「楽典の知識、作曲上の法則を一方向的に児童に伝授することはず、教師の設定した枠内ではあったが、児童に発見させるという方法」(p.96)が、「系統立った教科主義的な方法を児童中心主義的視点に立って改善し、児童中心主義との接点を見出そうとする努力」(p.96)と評価されている。三村真弓(2000)は、成城小学校の音楽教育を「当時の音楽教育が芸術教育の理論を採り入れ、教科としての論理性・系統性を確立していき、結果的に教科主義に向かっていった象徴である」(p.96)と結論づけた。

第2章 体育史の先行研究の系譜

(1) 体操科の授業の実態の究明をめざした教授理論的研究の試み

木村(1966)は、体操科の授業の実態の究明を体育史研究として取り組む必要性を次のように述べた。

「日本の近代学校体育(戦前長く使われた教科の名称からすれば“学校体操”)が具体的にどのような性格・内容を持ち、どのような教育的役割を実際に果たしてきたのか、が問われるならば、必然的に体育の“授業”の実態の究明が要請されよう。極言すれば、授業の実態が明確になっていなければ、政策や思想の実践への浸透、屈折や抵抗、制度の具体的状況も確実に把握することができないことになる。」(木村吉次, 1966, p.22)

ただし、授業は「教材を媒介とした教師による指導と児童・生徒の学習という相互作用の過程」である。

そのために、「教師－教材－児童・生徒の立体的動的な関係、相互作用の面に着目して考察することが必要である。」という。そこで、授業の実態を明らかにするために、次の3つの理由から授業の「方法論(教授理論)史的接近の試み」をとることになる。(木村吉次, 1966, p.22)

- ①「方法論」に「教師－教材－児童・生徒の立体的動的な関係、相互作用の面」が一番よく表現されている。
- ②「方法論」が授業の理論モデルを提供するので、実態のズレの測定を可能にする前提となる。
- ③「方法論」は「ある程度実践を意識して展開されていること」

ただし、「授業を規定する要因」は、「方法論」以外に、「思想・政策・制度・学校管理・施設用具等のものである」ので、それらとの関連も考慮に入れながら授業の「方法論(教授理論)史的接近の試み」を行うことが必要であるという。(木村吉次, 1966, p.22)また、「方法論(教授理論)史的接近の試み」のために用いる資料としてこれまで見過ごされてきた「学校日誌、教案、実践記録、生徒の日記・回想録など」の資料を活用すべきことを指摘している。(木村吉次, 1966, p.22)

小学校の体操科の授業を構成するための方法原理は、1900年代初頭に川瀬元九郎らによってスウェーデン式体操が紹介されることを契機に自覚されることとなる。スウェーデン式体操の方法原理は、運動の健康と身体形成への生理学的効果を基準とするものである。スウェーデン式体操は、その方法原理に基づき、教授すべき身体運動を構成し、その各身体運動を高度化するように配列するとともに、1回の教授順序を規定し、呼称で運動を指示するシステムを持っていた。このシステムは、学校体操遊戯取調報告を経て、学校体操教授要目<1913(大正2)年公布>の成立により、体操以外の教練や遊戯を含む体操科教授全体の原則として制度化された。

スウェーデン式体操自体は、近代的な教授方法のシステムを持つ合理的なシステムであった。スウェーデン式体操の方法原理を採用し、体操のみならず教練や遊戯という各種の運動教材の選択や配列を授業レベルまで具体化した学校体操教授要目の成立により、体操科の授業が全国の学校で実施されることが可能となった。しかしながら、学校体操教授要目で提示されたスウェーデン式体操の方法原理に基づく体操科の授業のシステムは、要目(全国)→細目(地方、学校)→週案(校長)→日案(教師)というトップダウンの中央集権的な教育課程行政とあいまって、教師の創意・工夫を抑圧する画一的な「定型化」をもたらしたことも指摘されている。

木村(1967c)は、学校体操教授要目(1913年)の公布を契機とした体操科授業の「定型化」は、その後2回の要目改正をへた1939(昭和14)の斎藤薫雄『体操の研究授業』の指導案にも見られると述べ、その「定型化」の根強さを指摘している。

その「定型化」に対して、木村(1967b)は、その後の大正期から昭和戦前期にかけての教授法の研究の発展の後をたどることを今後の体育史の研究課題としている。その際、学校体操教授要目の制定の中心になっていた永井道明の『要目の精神』から、学級内の能力の異なった子どもたちを区分して教えることや、他の生徒と異なった子どもを別の時間にひとまとまりにして教えるなどの、個別の取り扱いを提唱していたことを引用し、彼の言う「児童本位」の内実を検討することが重要と指摘していた。

この指摘は、学校体操教授要目で形成された「定型化」以後の体操科の授業の方法をめぐる研究が、体操科の授業における子どもをどのように把握しているのかという視点の重要性を示唆していると思われる。特に、大正期のいわゆる「大正自由教育」の諸研究が、「児童中心」というスローガンを掲げて、私立の新学校や師範学校の付属小学校における実践を踏まえて、子どもの興味や関心を教育の中心に置く教育論を主張した事実に注目し、それらの潮流の中の体育研究を検討することが必要である。

(2) 学校体操教授要目(1913<大正2>年)の普及過程の研究

1) 櫻井恒次郎の「合理的体操」に関する研究

体操科の授業の実態の究明を課題とした場合、1913(大正2年)に学校体操教授要目が公布されて以後、この法令に示された内容の学校への普及過程が検討されねばならない。群馬、鳥取、香川、福岡などは、この学校体操教授要目を忠実に実行しようと努力した県と指摘されてきた。なかでも福岡県においては、九州帝国大学医学部の解剖学者であった櫻井恒次郎が、解剖学の知見から運動の合理的解釈を行なう「合理的体操」を提唱し、講演や著作を通して学校現場に多大な影響を与えた。

大熊廣明(1979)は、1929(大正9)年5月4日から7日までの4日間、櫻井恒次郎の影響を受けた福岡県の体育を視察した山口県の視察団報告書である「福岡県体育視察録」を資料として、櫻井の「合理的体操」がどの程度学校で実践され、現場の体育研究にその理論がどのように影響を与えたかを明らかにした。

大熊廣明(1979)は、福岡県の小学校の体育の様子を次のように示している。体操科の基礎学として生理学、解剖学、衛生学、心理学、教育学、体育学が列挙されているが、その中でも解剖学、生理学、衛生学が中心であるとされる(立岩小学校)。そして、運動実施の順

序を下肢から上肢、頭、軀幹という身体部位で示したり、体操を「矯正」「発育」「調整」という運動の身体への生理的効果から分類するなど、運動を解剖学や生理学の立場から理解していた(飯塚小学校)。遊戯を「敏速運動」「強力運動」「持続運動」「巧緻運動」という運動強度から分類する生理学的立場をとる学校もあった(当仁小学校)ことから、体操のみならず遊戯などの運動までも生理学的に理解していたことがわかる。

さらに大熊廣明(1979)によれば、教授の方法は、示範→説明→練習→矯正というのが一般的であった。1回の授業時間は学校体操教授要目と同じく、準備運動→主運動→整理運動という段階に分けられた。そして、それぞれの段階に運動の強度による生理的効果の点から誘導的(準備的)教材及び矯正的教材、向上的教材、生理的教材が配当された。また、児童・生徒に自発的に自動的に運動させるべきであるという「自動主義」が主張されたが、その目的は児童の創造性や自主性の養成ではなく、児童の「合理的体操」への興味付けにあった。

大熊廣明(1979)によれば、福岡県の小学校では、「合理的体操」の普及が体育施設の拡充を促した。ただし、「合理的体操」の立場からの体育施設への関心は、運動場よりも「合理的体操」に必要な器械の種類や数、雨天時の体育施設にあった。また、服装の改良に関心が注がれ、各小学校で運動のしやすい安価な服装が工夫された。

2) 香川県香西小学校を対象とした体育史研究

学校体操教授要目(1913年)制定以後の体操科の授業の実態の究明を意図し、香川県香西小学校を対象とした体育史研究に、吉田豊(1973)、前田幹夫(1985, 1986, 1987, 1994)、木原成一郎(1989)らの研究がある。香西小学校は大正期から昭和初期にかけて同校で実践された体操科の授業の写真や指導案という授業の実態を示す資料を保存していた。この貴重な資料を用いて上記の一連の研究がなされたのである。

吉田豊(1973)は、徴兵時の壮丁体力検査で他の町村より甲種合格者数が劣っていたという香川県香西町が抱えていた体育上の課題に対し、地方体育振興という点で香西小学校がどのように応えていたかを明らかにすることを目的とした。吉田豊(1973)により、1913(大正2)年に校長となった合田綾一が中心となった香西小学校の大正期における体育振興策の全体像が実証された。

木原成一郎(1989)は、九州帝国大学教授の解剖学者である櫻井恒次郎の「合理的体操」論が、学校体操教授要目(1913年)の普及過程で果たした教授方法上の役割を検討するために、櫻井恒次郎の影響を受けた香西小学校の体操科の教材研究と指導案の内容を検討した。その結果、香西小学校が櫻井恒次郎の理論にもとづい

て自校独自の「体操教材配当表」や「教程」を開発していたことから、学校体操教授要目の普及のためには、生理学や解剖学の知識に基づき運動が子どもの身体や精神に与える効果を理解できる教師の力量形成が必要であることを指摘した。

前田幹夫(1985, 1986, 1987, 1994)は、1912(大正元)年から1926(大正15)年の香西小学校の体育研究と実践の全体像を3期に区分して明らかにした。前田幹夫(1985, 1986, 1987, 1994)は、大正期全体にわたる香西小学校体操科の授業の実態を踏まえた上で、香西小学校の先進性と問題点を指摘した。つまり、櫻井恒次郎の理論を学び、解剖学や生理学の立場から体操の科学的な教材研究を教師達が自主的集団的に行ったこと。さらに、体操の授業を可能にする服装や器械の改良及びそれらの整備に努めたことや実際の授業を対象にした公開研究会の実施により体操の普及に貢献したことが先進性と指摘された。

他方以下のような諸点が前田幹夫(1994)により、後進性と指摘された。香西小学校の教員達は、体操科の目的である「強健なる身体」が、「個人の生活のすべての基になる」(前田幹夫, 1994, p.226)と理解していた。しかしながら彼らは、個人の生活の幸福を願う目的と海外への帝国主義的侵略の基礎となる「強健なる身体」の形成という国家的要請との矛盾に気づいてはいない。さらに、体操科の重視は他の教科の軽視や教員の過重負担、保護者の過重な経済的負担を伴っていた。また体操科の授業が体操偏重、遊戯や教練の軽視となる傾向を生んでいる。同時に、香西小の体操科の研究が教材と指導法中心で児童についての研究が遅れていることから、「授業において児童が主体となるという実感がなかった」(前田幹夫, 1994, p.230)とされている。

(3) 自由教育が体操科の改造に残した成果に関する研究

1) 体育思想史からのアプローチ

入江克巳(1993)は、その研究の目的を以下のように述べ、日本近代体育思想の全体像の中に大正自由教育の影響を受けた体育の理論と実践を位置づけ、その歴史的な性格を明らかにしようとした。

「本書は、……大正デモクラシー期の体育思想とその実践を追い、今日の体育科教育論(=思想)とその方法原則、ならびに実践の系譜を追跡するとともに、明治体育思想の批判の上に成立したはずの体育改造運動とその思想・実践が、なぜに自らをファシズム・イデオロギーへの追従から断ち切れなかったのかという問題を基本的な課題としたものである。」(p.4)

入江克巳(1993)の分析の対象は、教育政策並びに学校体操教授要目の公布(1913年)と改正(1926年)等の体育政策、それらの体育政策を策定した人物や体育思想

家の体育思想、そして私立の新学校や師範学校附属小学校の体育の理論と実践など多岐にわたる。特に、大正期から昭和初期の体育の事例として、大正前期の成蹊小学校、成城小学校、明石女子師範附属小学校、旭川尋常小学校、鹿児島師範附属小学校、大正後期の千葉師範附属小学校、神奈川女子師範附属小学校、長野師範附属小学校、愛知県岡崎師範附属小、京都女子師範附属小、昭和初期の奈良女子高等師範附属小、児童の村小学校、明星学園が取り上げられている。

これらの事例は次のように全体として評価される。つまり、自由主義的体育実践の成果は、「近代的方法理念から伝統的な形式主義、画一主義的な理念や内容、方法が批判され、それらの批判をとおして近代的な体育思想の確立と実践化が志向され」た点にあるが、「個別化・社会(集団)化や興味の原理」が「子どもの本生の人間の権利の保証として追求されるのでなく」、一方で「労働力の科学的な品質管理の方法として」、他方では「天皇制という特殊日本的な社会の構造的な矛盾を個人化・心理化し個人的な経験の位置に解消し、個人への環境への適応能力の追求に自己を規定することになった(入江克巳, 1993, pp.278-279)。

入江克巳(1993)は、自由教育における体育の授業の内容や方法の改善は、「自由の概念を方法上の枠内に限定する方法主義が濃厚」(p.278)であったとする。「自由体育が児童中心主義の立場に立ちつつも、結局子どもの人間性の回復と発展という教育本来の課題に到達し得なかった」(p.279)理由は、方法上の改善に自己限定したところにあるとする。この評価は、授業の内容や方法の改善をそれらの授業が目指していた教育目的や人間像の歴史的限界と一体のものとしてみなして下されたものである。

また、入江克巳(1993)は、大正前期に自由教育の影響を受けた体育の事例として成城小学校をとりあげ、体育の改造をすすめた1920年代後半の島田正蔵による「遊戯による教育」を検討した。そして、島田正蔵の「遊戯による教育」は、体操科の遊戯教材の指導から「遊戯学習をコアとする合科的な生活学習論」に発展したと評価した(入江克巳, 1993, p.83)。

2) 広島高等師範学校附属小学校を対象とした研究

徳永隆治(1987)は、現在の体育科授業の改善の論拠を歴史的な遺産に求めるという意図をもって、「子どもを主体とする授業」の歴史的な遺産の掘り起こしを研究の目的とし、分析の対象を広島大学高等師範附属小学校の学校教育研究会が出版した『学校教育』誌所収の87点の論述及び授業実践報告、授業記録等の論稿とした。期間は、1927(昭和2)年1月号より1936(昭和11)年12月号までである。体操科の授業を分析する項

目は、「教材研究」「指導過程」「指導方法」であった。

徳永隆治(1987)は、「教材研究」の項目で、小学校全体の体操科の細目に「遊戯」教材がどの程度配当されていたかを、「遊戯率」(体操教材に対する遊戯教材の数の比率)という指標で明らかにした。徳永隆治(1987)は、附属小学校体育研究部発表の「体操科教授予定表」(1925(大正14)年)によると、「遊戯率」が「学校体操教授要目」(1926(昭和元)年)より高いことを指摘した。ただし、同時期に大石静信訓導が発表した「体操科教授予定表」(1926(大正15)年)では、「遊戯率」が「学校体操教授要目」(同)と同じであった。

また、徳永隆治(1987)によれば、大正期には「遊戯」の特質を運動量の多い点に求めている(松熊孫三郎, 1918(大正7)年2月号)に対し、昭和初期になると「遊戯」が「自治とか互助とかいう訓練」の場として「社会的特性を修練するもの」と捉えられるようになる(薄井祐二, 1928(昭和4)年11月号)。つまり、遊戯の教材解釈が、運動量の点からではなく協同で自発的に活動するという遊戯の特性を捉えたものとなっているのである。

さらに、徳永隆治(1987)によれば、1時間の授業レベルでは、各時間の指導の中心となる教材を「中心教材」とし、低学年では遊戯、中学年では体操、高学年になると教練というように教材の重点が移るようになる。1時間の授業レベルの分析は、「指導過程」としても行われた。昭和初期になると、「主教材」を中心とした指導過程が「誘導運動」「主運動」「整理運動」という3段階に区分されている点は学校体操教授要目と同じである。しかし、その各段階の運動の配列は「中心教材」の指導内容に応じて決定されるようになった(中尾勇, 1936(昭和11)年)。

なお、徳永隆治(1987)によれば、「表現遊戯」の4時間の「学習経過」が1時間ごとに「第1次」から「第2次」「第3次」「第4次」と区分して把握されている。4回の授業をひとまとまりとして系列化する発想は、今日の単元構成と共通する点があるとされている(薄井祐二, 1933(昭和8)年9月号)。

徳永隆治(1987)によれば、「指導方法」には、子どもの自発性を尊重する「子どもの示範」や「問いかけ」が出現する。つまり大正末になると、教師が子どもに手本を見せる「模範」や「示範」に対して、授業のヤマ場で子どもが手本を見せる「児童示範」や子ども同士で運動を批評しあう「相互批評」(大正14年7月, 大石訓導)が出現する。また、教師が子どもへ「問いかけ」る指導法が見られるようになる(松井和夫, 大正13年2月号)。さらに、昭和初期になると体力を測定し、子どもの体力に応じた運動を処方するという指導の個別化も具体化されていた(松井和夫, 1930(昭和5)年2月号)。

3) 広島県師範学校附属小学校を対象とした研究

岡本秀隆(1988, 1989a, 1989b)は、徳永(1987, 1988)と同様、現在の体育科授業の改善の論拠を歴史的な遺産に求めるという意図をもって、1920(大正9)年から1921(大正10)年の2年間、広島県師範学校附属小学校の主事であった千葉命吉の「創造教育」の影響を受けた広島県師範学校附属小学校の体操科の授業を分析した。広島県師範学校附属小学校の訓導、竹之内勝太郎が1922(大正11)年の「第11回公開研究教授」で公開した体操科授業指導案の特徴は次のようなものであった。授業の指導案を分析する項目は、1時間の「授業の目的」「授業の構成」「教授活動」であった。

岡本秀隆(1989a)によれば、竹之内勝太郎は、「尋常科第5, 6学年体操科教授案」の「授業の目的」に、体操をすることを通して「児童ノ工夫, 発見, 創造ノ精神ヲ陶冶シ, 運動ヲ真ニ理解セントスル熱烈ナル研究的態度ヲ養フ」と書いていた。その「授業の構成」は「①教授: 新教材 ②練習: 練習教材, 体操 ③練習: 練習教材, 遊戯 ④整理」とあるように、「始めの段階」①+「中の段階」②③+「終わりの段階」④という学校体操教授要目の3段階を踏襲している。ただし、「①教授: 新教材」では、「工夫」「発表」「研究討議」という子どもの学習活動が意図されていた。さらに、「②練習: 練習教材」の「体操」には「口, 運動により相互批正の利用。」とあり、子ども同士で批評して運動を訂正しあう子どもの学習活動が計画されていた。

岡本秀隆(1989a)によれば、広島県師範学校附属小学校訓導として千葉命吉の影響を受けた檜高憲三は、1923(大正12)年から1946(昭和21)年の敗戦まで西条尋常高等小学校の校長として「西条教育」と呼ばれる教育論を実践した。岡本秀隆(1989b)によると、檜垣憲三が残した1930(昭和5)年の「尋3 男体操科学習案」と1937(昭和12)年の「尋5 体操科学習案」は、「新題材と練習題材」から構成されている。そして、「新題材」は、「問題自識・問題構案・問題解決」の3段階からなる「問題解決的な学習過程」で構成されていた。この「自発問題に基づく相談学習法」は、児童が教師との相談によって自発的に問題を持ち解決する学習の仕方を教えた授業と考えられる。これらの「学習案」の目標や指導の方法には、子どもの自発性の尊重が見られる。しかしながら、「体操」「遊戯」「教練」という運動の教材は、学校体操教授要目と異なるものではなかった。1時間の体操科の授業の指導過程は、運動の生理的効果から3段階に区分するという点で学校体操教授要目と同一のものであった。

4) 奈良女子高等師範附属小学校を対象とした研究

鈴木明哲(1991, 1992, 1994, 1996, 1997)は、大正

期から昭和初期までの奈良女子高等師範学校附属小学校を対象として、木下竹次の体育思想とそれを基礎とした体操科の授業の実態を教授理論史的に検討した研究である。鈴木明哲(1991, 1994)は、奈良女子高等師範学校附属小学校の主事として「学習法」を提唱し、自由主義的教育実践を指導した木下竹次の体育思想と体育実践への影響を検討した。鈴木明哲の課題意識は、人間像や子どもの身体に対する国家的要請という体育の目的レベルと授業の方法上の改善を関連しつつも区別して捉え、体育思想の遺産と方法上の改善の遺産の双方を取り出そうとするものである。以下の引用がそれを示している。

「指導方法上の改革に過ぎないものであっても、そこに積極的役割を見出し、子供に対して良心的な教師等の存在と授業に対する創意工夫の熱意を指導方法上の改革のうちに認め、その実態を究明することを課題とする。」鈴木明哲(1991, p.44)

鈴木明哲(1991, 1994)によれば、木下竹次の体育理論は、子どもに対してのものと成人に対してのものという二面性を持つ。まずそれは、子どものための体育の授業改善という面から次のような継承すべき遺産であった。つまり、木下は、子どもの体育の教材に、「体操」や「衛生」よりも日常生活で子どもが体験する遊びなどの身体活動を「劇的遊戯」と命名して重視している。また木下は、教師の示範と子どもの反復練習という教授法に代わり、「生活目標」を子どもに定めさせ、その解決方法を子どもが自分で立案し実行する「目的批判法」を体育の「独自学習」とし、子ども同士が「相互実演」「相互研究」する小集団での学習形態を体育の「相互学習」として紹介した。さらに、木下は「体操図書室」を設け体育の「参考書・雑誌・運動年鑑・写真・図表を備えることを構想」するなど、体育においても子どもの学習の「環境」を充実する提案をしている(鈴木明哲, 1991, pp.48-49)。

しかしながら、鈴木明哲(1991)によれば、子どもの体育の先に将来の「和戦両様」という「立憲国家のもとで平和と戦争の両方」を担うことのできる健康な国民の養成という目的を置く発想は、体育の目的を国家が求める人材の養成に従属させる論理に道を開くものであり、後に「大東亜共栄圏の建設に寄与できる国民養成を前面に説く立場」へと木下の転向を導くこととなる(鈴木明哲, 1991, pp.46-47)。

木下竹次の体育思想を基礎に、体育の授業の改善を具体化した人物は、川口英明である。鈴木明哲(1992)によれば、川口英明は「個性に応じた、自律活動の体育」という「自體自健」の体育論を唱えた。ただし川口の授業改造は、指導方法に限定され、彼が目指し

た体育改革の究極の目標は「富国強兵」であった。川口の功績は、子ども自身が運動を面白く理解できるように、体育参考書、生理衛生参考書、写真、図表、器械を備えた「体育図書室」の設置を力説するとともに、自ら「教練」「遊戯」「競技」「体操」の4巻からなる『子どものための体育学習書』を出版した点にある。運動の仕方を子どもがこの本で学習できるように、この『子どものための体育学習書』は、漢字に平仮名がうたれ、図や写真をふんだんに使用してあった。また、遊戯や競技は川口が実際に授業で指導した運動のルールが紹介されている。

また、鈴木明哲(1996)は、学校体操教授要目の普及を徹底して行なった群馬県で尋常小学校の訓導を勤めた後、1934(昭和9)年に奈良女子高等師範学校附属小学校の訓導となった北井柳太郎の体育論と実践を検討した。北井はそれまでの「遊戯」を中心とした奈良女高師付属小の体操科を「体操」中心に転換させた。そして、北井の指導した「独自学習」は、川口のように『子どものための体育学習書』で調べて子どもに「学習案」を作らせるものではなく、各自が個別に体操をするというものであった。さらに、大正期の「相互学習」が子どもたちに自分たちで遊戯のルールを作らせていたのに対し、花井の「相互学習」は子ども相互に体操を観察させることであった。つまり、「独自学習」や「相互学習」は、北井の決めた目標を達成するための効率よい指導として活用されていたのである。

鈴木明哲(1997)は、1938(昭和13)年度の奈良女子高等師範学校附属小学校の緒方明吉と鶴井滋一の体操科学習指導案を分析し、木下や川口が実践した大正期の自由主義的な体育の授業は、彼らの場合にも変質していることを実証した。

大正期から昭和初期にかけての奈良女子高等師範学校附属小学校を対象とした鈴木の一連の研究は、戦後に継承すべき遺産と清算すべき遺産を明確にするために、木下竹次の「学習法」に基づき成立した自由主義的な体育の授業の大正期から昭和初期にかけての展開と転換の実態を実証している。

おわりに

成城小学校のカリキュラム開発に関する先行諸研究は、小学校全体と各教科の大きく二つの系譜に区分される。前者の小学校全体のカリキュラム開発に関する研究は、カリキュラムの組み換えを導いた理論的根拠に焦点があてられ、後者の各教科レベルの研究は理論的根拠とともに、授業に具体化された内容や方法の改造の実態の究明に焦点があてられていた。焦点に違いはあっても、竹本英代(2000)が「成城小学校のカリキュ

ラム改革は、ヘルバルト学派の教科論を基本としながらもアメリカの児童研究運動を参考にした教育学研究の産物」と指摘した評価は、国語の改造において児童の語彙数の調査結果を根拠とした「聴方」科の特設(北村和夫, 1986)や松本浩記と島田正蔵が子どもの思想世界の実態調査をもとに修身教材を選択した(谷口雅子, 1999)教科レベルに反映していることがわかる。このアメリカの児童研究運動を初めとする教育研究からの影響という分析の観点は戦前期の成城小学校のカリキュラム開発を分析する観点として必須のものである。

教科レベルの研究には、教科の改造を進めた人物の主張の検討に終わったものもあるが、研究授業の批評会の資料を用いて実際に指導した授業レベルで内容や方法の改造の実態を分析した研究(北村和夫, 1986 谷口雅子, 1999 三村真弓, 2000)がみられた。また教科のレベルの改造は、成城小学校訓導が自作した出版物を教科書として用いるまでにいたっていた国語と低学年理科を新設した理科をのぞけば、その改造の中心は方法レベルにとどまり内容の改造にいたっていないと思われる。

他方、大正期から昭和初期の体操科を対象とした体育史の先行研究によれば、学校体操教授要目(1913)年の普及を目指した潮流には、児童・生徒の自発的な運動への着目を制度化された内容を効率よく学ばせる手段としてしかみなされていない点が指摘された。それに対して、制度化された学校体操教授要目の内容を批判した自由教育の潮流においては、方法の改造に継承すべき遺産があると指摘された。ただし、広島高等師範学校附属小や広島県師範学校附属小、奈良女子高等師範学校附属小での体操科の改造は、内容の改造にすすんでいない点が指摘された。

【文 献】

- 入江克巳(1986)『日本ファシズム下の体育思想』不昧堂。
 入江克巳(1988)『日本近代体育の思想構造』明石書店。
 入江克巳(1993)『大正自由体育の研究』不昧堂。
 大熊廣明(1979)「福岡県の合理的体操—『福岡県体育視察録』より—」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第21巻, 第1号 pp.85-108。
 大熊廣明(1983)「桜井恒次郎の『紳士体操』について」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第25巻, pp.145-154。
 大熊廣明(1984)「大正期の小学校における体育と学校衛生の関係について—福岡県の場合—」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第26巻, pp.107-117。
 岡本秀隆(1988)「小学校体育の授業構成に関する史的 研究(その1)—広島県師範学校附属小学校の創造教育

- から一」『日本体育学会第39回大会号B』p.803.
- 岡本秀隆(1989a)『小学校体育の授業構成に関する史的研究—広島県師範学校附属小学校・西条小学校の創造教育を中心に—』(1988年度広島大学大学院学校教育研究科修士論文)
- 岡本秀隆(1989b)「小学校体育の授業構成に関する史的研究(その2)—檜高憲三の西条教育を中心に—」『日本体育学会第40回大会号B』p.806.
- 奥野庄太郎(1922)「木村君の体操実地授業」『教育問題研究』第28号, pp.103-105.
- 落合盛吉(1923)「問題と実験による生理衛生の学習」『教育問題研究』第37号, pp.38-39.
- 北村和夫(1977)『大正期成城小学校における学校改造の理念と実践』成城学園澤柳政太郎研究会, p.68, p.132.
- 北村和夫(1979)「解説(1)澤柳政太郎における成城小学校創設の構想」『澤柳政太郎全集4』国土社, p.431.
- 北村和夫(1986)「大正新教育と成城小学校(1)—国語科の教科改進と『児童文化としての教科書』—」『聖心女子大学論叢』Vol.68, pp.35-73.
- 木原成一郎(1989)「『学校体操教授要目』(1913年公布)の普及過程に関する一考察」『京都大学教育学部紀要』第35号, pp.267-277.
- 木村吉次(1966, 1967a, 1967b, 1967c)「体育授業のうつりかわり, その1, その2, その3, その4」『体育科教育』14(1), 15(4), 15(6), 15(9).
- 木村吉次(1981)「日本の近代学校体育に及ぼしたスウェーデン式体操の影響について」『学校体育とスポーツ促進運動の歴史—国際体育・スポーツ史東京セミナー報告書』
- 木村勇人(1998)「成城小学校における国語教育と副読本」『横浜国大國語教育研究』Vol.9, pp.26-47.
- 佐藤武(1920)「小学校に於ける学科課程の改正を論ず」『教育問題研究』第4号, pp.26-46.
- 澤柳政太郎(1909a)『實際的教育学』同文館, pp.234-241.(『澤柳政太郎全集1』国土社, 1975年所収.)
- 澤柳政太郎(1909b)「教育学批判」(東参一市四郡教育会連合夏期講習会における講演速記)p.355.(『澤柳政太郎全集1』国土社, 1975年所収)
- 島田正蔵(1926)『体育原論』大同館書店, pp.1-35, p.200.
- 島田正蔵(1937)「教育の直接性を追う」『修身教育』1937年8月号, p.71.
- 鈴木明哲(1991)「大正自由教育における体育について—木下竹次と奈良女子高等師範学校附属小学校の場合—」『体育史研究』8号, pp.43-54.
- 鈴木明哲(1992)「奈良女子高等師範学校附属小学校時代の川口英明の体育に関する一考察」『体育史研究』9号, pp.19-32.
- 鈴木明哲(1994)「昭和戦前期における木下竹次の体育論の変容について—『心身一如』を中心として」『体育史研究』11号, pp.27-39.
- 鈴木明哲(1996)「北井柳太郎の体育論と実践について—群馬県と奈良女子高等師範学校附属小学校をつなぐ人物として—」『体育・スポーツ史研究の展望—国際的成果と課題—』不昧堂, pp.503-518.
- 鈴木明哲(1997)「昭和13年度の奈良女子高等師範学校附属小学校における体育実践について—指導案の分析から」『体育史研究』14号, pp.43-58.
- 竹本英代(2000)「成城小学校における初等カリキュラム改革の理論」『カリキュラム研究』Vol.9, pp.21-34.
- 谷口雅子(1999)「戦前日本における教育実践史研究4の1—社会認識教育を中心として(私立成城小学校における実践)」『福岡教育大学紀要—2分冊—社会科学編』Vol.48, pp.57-70.
- 鶴岡義彦(1986)「小学校低学年理科設置の論拠づけに関する事例の分析—「低学年理科特設運動」の初期における成城小学校の場合」『島根大学教育学部紀要—教育科学』Vol.20, pp.85-96.
- 徳永隆治(1987)「体育授業における教授活動の史的研究—「学校教育」誌にみる戦前の変遷—」『教育学研究紀要—第2部』第33巻, pp.372-377.
- 徳永隆治(1988)『体育授業における教授活動の史的研究—「学校教育」誌にみる大正期・昭和初期の変遷—』(1987年度広島大学大学院学校教育研究科修士論文)
- 前田幹夫(1985)「大正期における学校体育の研究—香西小学校における体育実践の動機と体育方針を中心として—」『高知大学教育学部研究報告—第2部』第37号, pp.71-78.
- 前田幹夫(1986)「大正期における学校体育の研究—香西小学校における教材研究の観点と内容について—」『高知大学教育学部研究報告—第1部』第38号, pp.193-201.
- 前田幹夫(1987)「大正期における学校体育の研究—香西小学校の授業研究を中心として—」『高知大学教育学部研究報告—第1部』第39号, pp.151-159.
- 前田幹夫(1994)『大正期の学校体育の研究』不昧堂.
- 三村真弓(2000)「大正期から昭和初期の成城小学校における音楽教育実践」『児童教育研究』Vol.9, pp.89-98.
- 山村俊夫(1979)「大正期の私立小学校における歴史教育の実際—成蹊小学校と成城小学校を中心として」『関東教育学会紀要』Vol.6, pp.14-27.
- 山本信也(1994)「大正期の成城小学校に於ける「数字」科カリキュラム」『熊本大学教育学部紀要—人文科学』Vol.43, pp.13-28.
- 吉田豊(1973)「『学校体操教授要目』(大正2年)の受容過程に関する研究」(1972年度東京教育大学教育学部修士論文)